

Well-being の向上のためのアートに関する研究

～パブリックアートの調査と、アプリ活用の提案～

令和4年度市民まちづくり研究員 林田 亜希子

はじめに

アートが Well-being を向上させると最近注目されている。

この Well-being とは「身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念であり、人々の満足度や充実、幸せなどを表すもの(福岡市 HP より引用)」を指す。2019 年には WHO (世界保健機関) が「Wellbeing には芸術が重要な『処方箋』である」という研究報告書を発表し、近年海外ではアート鑑賞チケットを「医療」の一環として薬の代わりに処方する事例も出てきた。

2022 年から福岡市は、彩にあふれたアートのまちを目指して、暮らしの中で身近にアートに触れる機会を増やし、アーティストの成長支援に取り組む「FUKUOKA ART NEXT」(以下 FAN) の推進を開始した。FAN のホームページには「市民がアートに触れる機会を増やし、その価値や魅力を感じて Well-being を向上させるとともに、アーティスト活動を支援し、世界で活躍する福岡発のアーティストの増加を目指している」と掲載されており、2022 年に行われたアートイベントは成功を収め、福岡市民が素晴らしいアート作品を目にする機会が増加している。

その一方で、福岡市内には 200 点以上のパブリックアートと呼ばれるものも多く存在する。

このパブリックアートには 3 つの概念がある。

1. 公共の空間にある身近なもの
2. 公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値の付与に目的をもつもの
3. 素材や表現の手段は水や映像、パフォーマンスアートなども含め多様化している

1. が最も目立つものであるが、今回注目したいのは 2. の「公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値の付与に目的をもつもの」であり、これには「設置される空間の環境的な特性や周辺との関係性において、空間の魅力を高める役割をになう、公共空間を構成する一つの要素と位置づけされているもの」という補足も加えられている。

福岡にはこの目的を体現している素晴らしいパブリックアートも多くあるが、中にはそうでない作品も存在する。なぜそこに存在しているのかが分かりづらい作品や経年劣化がみられる作品があり、結果として、公共の福祉や地域共同体の活性化とは縁がなく、文化的な価値の付与に目的をもっているとは言い難い作品となっているのが現状だ。

今回の研究では、パブリックアートの変遷を振り返り、作品の調査と関係者のインタビュー

一も加えそこに分析を加えることで、「公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値の付与に目的をもつもの」を示し、上記におけるパブリックアート価値の再認識とすることを目的としている。

また後半では、アプリの活用の提案を追記した。パブリックアートだけでなく、街中にあるアートを多くの方にもっと身近に感じ日頃から楽しんでいただける機会をつくるために、そのきっかけづくりとしての提案とする。

福岡市民の Well-being の向上のために少しでもお役に立てれば幸いである。

1. 日本のパブリックアートの変遷

「パブリックアート」という用語はアメリカ生まれの新しい概念だが、それ以前から「野外彫刻」が日本に存在していた。野外彫刻とは「直接的な衣食住以外の目的で、人間が石や木や土やその他多様な素材を彫り削り肉付けし、時には構成して野外または屋外の空間に設置、あるいは配置した精神性の高い造形物」と定義されており、厳密には社会性の強いパブリックアートとは異なる。しかしアートとは「芸術・美術など間接的に社会に影響を与え得るもの」であり、本来社会性を共有するものであるため、ここでは同様のものと仮定し、日本の野外彫刻の歴史と 1980 年代以降の設置事業の特徴やタイプを述べるものとする。

(1) 歴史

①戦前から 1950 年代まで

戦前の野外彫刻の対象は実在の人物をモチーフとする彫像が多く、例えば、記紀神話や歴史上の人物、明治維新、西南戦争、日清・日露戦争などでの功労者、軍人、政治家、文化人等が高い台座に設置された。当時の軍国主義を表現するモニュメントとなっていた。

戦時中は銅鉄供出により大部分が撤去され、戦意高揚のために残された軍人系の作品も終戦後 GHQ の指示や民間の破壊行為により撤去・移設された。

終戦直後の混乱期も戦前の銅像の撤去・破壊、移設が行われ新しい設置事業は見られなかったが、1940 年代末から徐々に再開される。地域に縁のある歴史上の人物、文化人等がその対象になっているが、戦前から全国の小学校などに設置されていた二宮尊徳像は、交通安全や児童福祉の観点から問題視されるようになり、徐々に減少していく。

②1960 年代

彫刻独自の空間的存在感の意義を提起した野外彫刻展構想を 1961 年に実現させたが、「野外彫刻美術館」という名の宇部市常磐公園での「第 1 回宇部野外彫刻展」である。当時の宇部市は石炭の粉塵による公害や戦争後遺症としての傷痕に加え、暴力団抗争による人身の荒廃に悩んでいた時期であった。その阻止のため宇部を花で飾る事業の継続が「花いっぱい運動」として展開され、その後「花と彫刻運動」へと変遷した。その結果が日本初の全国公募の野外彫刻展となる。

さらに、宇部市と同じく野外彫刻展の作品設置で市内全域を彫刻で飾る「ミュージアム構想」を思案した神戸市も「第1回神戸須磨離宮公園現代彫刻展」を実施した。ただし宇部市と異なるのは、宇部市が彫刻により都市環境を改善しようとしたのに対し、神戸市は彫刻を用いたこれまでにない新しい都市環境の創造を目指したところにある。その根底には、京都市や大阪市とは違った神戸市独自の文化的環境を創造したかったのかもしれない。1960年代後半からは民間企業の野外彫刻美術館「箱根彫刻の森美術館」で国際公募の野外彫刻展が開催となった。フジサンケイグループにより、後にヘンリー・ムーア大賞展に発展する「第1回現代国際彫刻展」である。

③1970年代

1970年代の野外彫刻展は1970年の「日本万国博」を起点として、現代彫刻が積極的に野外に進出していき、評価もなされる。特徴としては、大形野外彫刻展のテーマ化にみられる建築と都市空間、箱根彫刻の森にみられる自然空間と作品等のように、場と作品の調和やその存在感等が真剣に議論された。また、地方都市へのさらなる拡散化傾向は、60年代とは異なる個性的な拡散がなされたことだ。

④1980年代

1980年代は、後半に野外彫刻が爆発的に増加する点が最大の特徴だ。地方自治体による計画的な設置が可能になった。都市の再開発や景観整備、まちおこし事業などといった観点から、彫刻のあるまちづくりが重要視されていく。設置の作品も、点から線、線から面といったように、複数・多元的になっており、それはバブル崩壊の頃までつづくことになる。

ちなみにアメリカから「パブリックアート」という用語が入ってきたのはこの頃であり、福岡市が「彫刻のあるまちづくり事業」を開催したのも同時期である。

⑤1990年代以降

90年代はバブル経済の終焉や95年の阪神淡路大震災の影響が決定的となり、急激に野外彫刻展は減少する。現在まで続くものとしては、日本野外彫刻展をリードし2009年から「UBEビエンナーレ」と称される「現代日本彫刻展」、1963年以来毎年開催され全国最長記録更新中の「徳島彫刻集団野外彫刻展」、同様に毎年開催の大阪彫刻会議主催の「花と彫刻展」、そして1996年に登場した茨城県桜川市の「雨引きの里と彫刻」のみである。

日本におけるパブリックアートの歴史を分析すると、戦後の銅像の撤去・破壊、移設から欧米諸国とは違った新しいタイプの野外彫刻がつけられ、日本的な展開の中で世界情勢や開催地の地域状況が複合しながら独自の進展を遂げたといえる。最初は白色セメントの普及と彫刻芸術の社会的認知の強化が強かったが、回数を重ねるごとに彫刻のもつ存在感や設置空間を含む場への新しい関わり方、様々な素材による表現の幅が広がり、その複合が彫刻の本来の姿を模索させてきた面がある。すなわち、彫刻や野外の造形物が公共空間へ関わることの意味が、芸術と人間の生活、人間のコミュニケーションを問い直すという美学上の問題提起が投げかけられ、結論に達しているのが現在である。

また、野外彫刻展による作品収集で「彫刻のあるまちづくり」から「パブリックアート事業」に移行していくが、「90年代のバブル経済の終焉」や「失われた20年」を乗り越えてまで、「彫刻のあるまちづくり」の作品が場や地域への芸術文化としての価値の認識を深めていった。加えて、アーティストと研究者の共創的にコミュニケーションが存在していたことがアートの総合的な可能性を示す「アートプロジェクト」に繋がっていくことになる。

(2) 1980年代以降の設置事業のタイプ

①具象作品を主体とし、特定の場所への集中的設置を実施するタイプ

既製の具象作品を主体としつつ、特定の都市公園や道路などに集中的に設置を行うタイプの事業で、1980年代から多くの事例が見られるようになる。千葉県佐倉市のJR佐倉駅前周辺の設置、富山県富山市の松川の河川敷にて彫刻公園化を計る事業開始、長野県佐久市の佐久市立美術館のある県立駒場公園の集中的設置、新潟県上越市の高田公園の「ブロンズプロムナード」整備による設置がこのタイプである。いずれも数年間で終了している。

②都市計画的な視点から設置事業を推進するタイプ

都市計画的な視点から、計画的に事業を推進するタイプである。継続性のある事業が多く、市街地に散在して作品を配置している。北九州市の「北九州市彫刻設置基本構想」、名古屋市の「名古屋市彫刻設置懇談会」、広島市の「広島市彫刻のあるまちづくり基本構想」、福岡市の「彫刻のあるまちづくり事業」がこのタイプである。

③オーダーメイド方式

オーダーメイド方式は多くの都市で採用された。プロセスは①特定の設置場所を設定する、②その場所に適した作風の制作者を一人選定する、③その制作者に設置場所をふまえたオリジナルの作品を制作してもらい完成作品を設置するというものだ。設置場所をふまえて制作された作品が設置対象となるため、意味的、形態的に設置場所との関連が明確な作品が得られ、オリジナル作品としてシンボル性が高く制作者選択の幅が広いという長所がある。

2. パブリックアートの現状調査と課題

この章ではパブリックアート作品の実際の調査と関係者のインタビューをご紹介します。福岡市の作品だけでなく、2010年から始まり一定の成功を収めている瀬戸内国際芸術祭の作品も比較し調査とインタビューを行い課題を明らかにする。

(1) 福岡市のパブリックアートについて

福岡市では、都市が美しく感じられ、ゆとりとうるおいのあるまちづくりを市民全体で共有できる都市空間を生み出すため、1983年より計画的な設置事業「彫刻のあるまちづくり事業」を開始し、これまでに25基の彫刻が設置されている。初期には作品内容に対するコンセプトが稀薄で、作品間の関連性・統一性に問題が感じられたが、近年はカラフルで派手

な作品を積極的に選択し、福岡らしい活気あるイメージの形成に成功している。

(2) 福岡市のパブリックアート 25 基の現状調査

表 1 福岡市パブリックアート 25 基

①風のプリズム	作者：新宮晋
設置：1983 年	場所：水上公園
設置経緯：記念公園の復旧にあたり福岡市の新しいシンボルとして設置	
	作者は 1937 年大阪府出身であり、風や水といった自然エネルギーで動く彫刻 60 年代後半から制作し、人間と自然との共存を一貫してテーマとしている。目に見えない風が作品が動くことで可視化され、煌めく光によって一瞬一瞬違った表情を見せ、水上公園の雰囲気に合う。
②空の門	作者：毛利陽出春
設置：1985 年	場所：榎田中央公園
設置経緯：福岡空港と都心を結ぶ幹線道路沿いに、来訪者に心地よい印象を与えるため	
	作者は長くイタリアで活躍している地元作家。福岡空港通りと博多バイパスの交差点近くに設置されている。磨かれた面と荒削りの面をもった石柱が有機的に組み合わせられながら一対となって高くそびえる。車の多い割に人通りが少なく作品の存在が見逃されやすい。石柱間に虫の巣のようなものがある。
③桂の影	作者：山崎朝雲
設置：1986 年	場所：綾杉ビル横
設置経緯：福岡市の東西結ぶ主要幹線道路沿いに地元の近代彫刻巨匠のシンボルとして	
	作者は 1967 年博多区冷泉町生まれで日本近代彫刻の礎を築いた。「桂の影」とは「月の光」の意味で、兔を抱える幼児は、指折り数えて卯月(旧暦の 4 月)を待つ、「春の月」の化身を表す。作品色でない黒い劣化が目立つと、大通り沿いだが奥にあり見逃されやすい。
④那の津幻想	作者：豊福知徳
設置：1987 年	場所：博多座(リバレイン)前
設置経緯：博多の新しいシンボルとしてその歴史を物語る半具象の作品を彫刻家に依頼	
	作者は久留米出身で初期には富永朝堂のもとで研鑽を積み後にイタリアを拠点に活動する。船尾に人物が垂直に配置される〈漂流〉シリーズの 1 つで、胸に穴が開いた人物が、その痕跡を静かに湛えている作品で同シリーズ大作の「那の津往還」は博多港にある。一人一花運動の花壇に守られている印象だが、一見作品だと分かりづらい
⑤どっこいしょ	作者：小田部泰久
設置：1988 年	場所：中洲川端駅付近
設置経緯：博多の歴史を物語るような半具象の作品を地元在住作家に依頼	
	作者は 1927 年福岡市出身。全体の形は博多の聖福寺のイメージで、握り拳だけが写実的であり気合の込めた力強さが強調されている。那の津幻想の通りを挟んだ向かい側にある。一人一花運動の花壇に守られている印象だが、仰ぎ見る高さにあり通りから距離がなく近くにバス停もあり鑑賞しづらい。

⑥メロディー	作者：ラスト・R・ラヴィーナ
設置：1988年	場所：千代交番横
設置経緯：千代地区市街地再開発事業にて浮揚発展を表現し地区のシンボルとして	
	作者はスロヴァキアに生まれカナダに移住。複雑に組み合わせられた人物像によって4つの面があり、南東向きに「生命の旋律」（身ごもった女性のヴァイオリン弾き）、南西向きに「出会い」（思春期の少女）、西向きに「巣立ち」（足を踏み出す女性）、北向きに「優しき肌ざわり」（子供を抱く女性）と太陽の動きと連動して意味をもたせている。一人一花運動の花壇に守られている印象であり、非常に分かりやすく、街のシンボルとなりやすい。
⑦ソフィー	作者：朝倉響子
設置：1988年	場所：西鉄高宮駅前広場
設置経緯：交通広場に周辺街路のモールと調和する人間中心の新しい広場の演出のため	
	高宮駅一帯の再開発のため設置された作品。ベンチに座っている女性像とベンチが1つになり地上に置かれている。作品が景観の中に溶け込んでおり、時に首にマフラーが巻かれるなど親しみを持たれている印象を受ける。
⑧着衣の横たわる母と子	作者：ヘンリー・ムーア
設置：1988年	場所：博多駅前広場
設置経緯：市制100周年記念にて駅前広場に福岡のイメージに合う「顔」的存在として	
	作者は1898年イギリス、ヨークシャー出身の20世紀の彫刻界を代表する彫刻家であり、「母と子」「横たわる人体」を題材に生涯にわたり追求。横たわる母親の優美な流線形のフォルムと体内に空けられた空洞が特徴的で母親の包容力や慈愛が伝わってくる。この作品の設置協力者名簿はカプセルに入れて台座におさめられている。作品の周りのグリーンや水の演出、ベンチの併設など空間的魅力を高める作品として成果をおさめている。
⑨微風	作者：高倉準一
設置：1989年	場所：中洲4丁目那珂川河畔
設置経緯：都市と海を結ぶ遊歩道に市民が水とふれあい親しめる親水空間創出のため	
	作者は地元の作家。川に面した一画が小さなポケット・スペースとなり作品が置かれ、高い柱のような台座に不安定な姿勢で少女が穏やかな表情で身を委ねている。作品は大きさもあり素晴らしいものの、丁寧な解説付きの作品が周りに多数設置されている地域にこちらは解説等ないためもの足りなさを感じる。
⑩風景門	作者：安川民敏
設置：1990年	場所：明治通り中央区役所前
設置経緯：大名のおしゃれでファッションブルな空間イメージにマッチした作品として	
	作者は地元の作家。磨かれたステンレスの円柱とそれを支えるような枠組みの角柱、斜めにねじれたフォルムがアクセントとなり、四囲の色鮮やかな風景を映している。残念ながら周りの空間に作品が埋もれていてそこに作品があることが分かりづらく、汚れが目立つ部分もある。

⑪春を奏でる	作者：中村晋也
設置：1990年	場所：警固公園
設置経緯：福岡ライオンズクラブ10周年記念事業の一環として寄贈される	
	作者は1926年三重県出身で現代具象彫刻を代表する一人で、大阪城「豊臣秀吉公像」、鹿児島中央駅前「若き薩摩の群像」など歴史上の人物の銅像も多く手掛ける。ミューズを思わせる豊かな女性が、やや身をそらせながらヴァイオリンを奏で、姿態には軽やかなリズムが流れていて、いきいきとした伸びやかさと躍動感に満ちた春の精の像。ヴァイオリンの弦が切れているように見受けられたのと、高くて視界が届きづらい部分の汚れがあり、整備の難しさを感じる。
⑫輝・翔	作者：望月菊磨
設置：1990年	場所：博多の森陸上競技場
設置経緯：国体及び全国身体障害者スポーツ大会の国体メイン会場にシンボルとして	
	直立する半円筒と、斜めにずらされて交差する同型の半円筒によって構成され、曲面は鏡面仕上げで、断ちわったような平面部は鋭い光をもち、晴天の時は光り輝き美しい。見上げる小高い台地に設置されているため、高さ12メートルでも更に大きく感じ、力強く存在感がありこの場所にふさわしい。
⑬スウィング	作者：クレメント・ミドモア
設置：1991年	場所：荒戸交差点
設置経緯：都市部の入口という特徴から福岡市のシンボルとなるものを設置	
	作者は1929年オーストラリア・メルボルン出身でNYで活躍する芸術家で、巨大な長方形が自在にねじれたり曲がったりするダイナミックな作品を制作する。本作も金属の重厚感と造形のしなやかさとの差異がユニークであり、「シンプルながらあらゆる方向から鑑賞することができる作品」と作家は語っているとのこと。その劣化も目立ちやすいが、素材からなのだろうか、経年劣化が良い味を出している。
⑭恋人たち	作者：オシップ・ザッキン
設置：1991年	場所：福岡パルコ前
設置経緯：国際文化都市を目指す福岡のシンボルゾーンに相応しい街路空間の創出	
	作者は1890年旧ソ連(現在のベラルーシ)出身、イギリスで造形学を学び渡仏後はピカソ等エコール・ド・パリの芸術家と親交を結び、アフリカ彫刻の影響を受け、キュビズムの原理と伝統的な西洋の造形美を融合させた独自のスタイルを確立。一人一花運動の綺麗な花壇に囲まれた、寄り添う2人の抽象的ながらも実在感のあるボリュームの作品で天神に似合う作品。向かって右側の作品に悪戯されたような跡がある。
⑮プリマヴェーラ	作者：エスター・ワートハイマー
設置：1992年	場所：福岡市庁舎ふれあい広場
設置経緯：新市庁舎完成にて市民に親しまれ国際都市に相応しいモニュメントとして	
	作者はポーランド出身でカナダ・モントリオールに移住した女性で、30代よりモントリオール美術館で学び、その後イタリア、オーストリアに留学。躍動感あふれる優美な女性像を得意とする。タイトルはイタリア語で「春」を意味し、成長と発展を続ける福岡市のイメージを重ね、非常に伸びやかで大きい。

⑩ブリーズ、リクエスト	作者：黒川晃彦
設置：1992年	場所：福岡市庁舎ふれあい広場北側
設置経緯：ライオンズクラブ 337-A 地区から第 38 回年次大会に際し寄贈を受ける	
	作者は 1980 年生まれの日本彫刻家で、作品の大半は楽器を手にした野外彫刻で人との関係を大切にし人々の生活の場に置かれる。人物とベンチを組み合わせており、具象彫刻の可能性を開いたとして横浜美術館長賞を受賞。素敵な作品だが全体的に経年劣化と汚れが目立つ。
⑪無限空間 '93	作者：豊田豊
設置：1993年	場所：大名 2 丁目交通局
設置経緯：地下鉄全線開通で安全で快適な市民の足として都市交通の要の発展願い設置	
	作者は山形県出身だがのちにブラジルに帰化した環境芸術家。「宇宙空間」をテーマに日本、イタリア、ブラジルに作品を残している。巨大な素晴らしい作品だが、大きな作品が景観に溶け込みすぎていて作品と気づかない人も多く展示方法に期待したい。
⑫ミラー・ニジンスキー	作者：バリー・フラナガン 設置：1993年
設置：1993年	場所：百道浜ふれあい橋
設置経緯：活力あるアジア都市イメージで橋のコンセプト「水上の劇場空間」に合わせて	
	イギリスの現代彫刻の旗手で 80 年代以降「野兎」を題材とした作品を多く制作している。ニジンスキーはロシアの伝説的なバレエダンサーで、跳躍は空中に静止して見えたとも言われ、それを野兎でユーモアに表現している。ふれあい橋の両端の川岸に 1 体ずつ設置されていて左右対称のため「ミラー」だが、実は違いがあるとのこと。大変ユニークな作品であるにも関わらず、この橋は歩行者用のため、それ以外の人は作品そのものに気づきづらい。
⑬大きな愛の鳥	作者：ニキ・ド・サンファル
設置：1993年	場所：地行中央公園
設置経緯：目指す国際文化都市のシンボルかつシーサイドももちの活力と発展の象徴	
	作者はパリ出身の女性芸術家で初期は銃で作品を撃ち抜く「射撃絵画」という過激な作風で注目を集め、その後カラフルで量感あふれる女性像を生み出した。作品は神話に着想を得ており、鷲の頭部をもつ天空と太陽の神「ホルス」の体に愛の神「キューピッド」が合体して大きなエネルギーを感じる。作品の下にある大きな台座に生い茂るグリーンが不揃いで惜しい。
⑭無題	作者：キース・ヘリング
設置：1994年	場所：中央区あいれふ前
設置経緯：生前エイズ予防キャンペーンに積極的参与した作者の作品をあいれふに設置	
	作者は 80 年代アメリカのグラフィティアーティストで一躍時代の寵児となり、無許可で地下鉄の広告パネルに短期間で描かれるためシンブルで分かりやすいイメージがある。なぜこの作品がこの場所にあるのか、ストーリーを表に出していないのは意図的なのか。

②①森の詩	作者：加藤昭男
設置：1996年	場所：中央区総合図書館
設置経緯：図書館開館に伴い知恵の象徴であるフクロウとヘビの彫刻設置	
	作者は1927年愛知県出身、日本の野外彫刻展で数多くの賞を受賞している彫刻家。存在感のある素晴らしい作品だが②①と同様、作品の解説等の展示がないためヤストーリー伝わらない分それ以上の親近感に欠ける。
②②PIM PAM POOM	作者：フェデリカ・マッタ
設置：1997年	場所：博多の森球技場
設置経緯：球戯場前広場の特性「躍動感、抑揚感」「爽快感、満足感」をコンセプトに	
	作者はフランス出身の女性作家。この作品はオーダーメイド作品でサッカープレー中の動きと試合運びの様子を表し、エネルギーを感じる。ゆっくり鑑賞できるスペースがあり、博多の自然と調和している。展示スペースの「スノーボーしないでください」の張り紙が目立つ。
②③平和の門・おかえり・大きな一歩・顔が西向きや尾は東・見晴らし台	作者：松永真
設置：1998年	場所：天神西交差点
設置経緯：不法駐輪を抱えるポケットパーク改良に彫刻設置し整備	
	作者は1940年東京出身の第一線で活躍するグラフィック・デザイナーの一人。立体シリーズ「メタルフリークス」の延長上にあり、遊び心溢れる原色で簡素なフォルムの作品。周りに緑が多く季節によってはその緑の覆われ存在が埋もれるのが難点だが、「平和の門」では海外観光客とのフォトスポットとしても写真に収まる光景を目にするため天神のシンボルにもなる。
②④長浜 4899	作者：松尾伊知郎
設置：1999年	場所：中央区心身障害福祉センター
設置経緯：福祉の道路整備に合わせ隣接の心身障害福祉センター通所者との協働作品	
	作家は1963年鹿児島出身の陶芸家。センター利用者との共同制作である作品は、「トルコ青」の釉薬が鮮烈な陶板とユーモラスな形態が印象的だ。「人と作品のあいだに何かが生まれる空間をうみ出すこと」が主題で、作品に触れるだけでなく入ることも可能とのこと。存在感のある作品だが、解説等ないためアートなのか、遊具なのか、触れていいのか、人によっては迷うかもしれない。
②⑤Dragon King Rabbits	作者：吉水浩
設置：2001年	場所：姪浜駅前南側広場
設置経緯：姪浜区画整理事業にて顔づくりのためのモニュメント計画にあわせて設置	
	作者は1965年生まれ彫刻家。姪浜の龍王うさぎ伝説をモチーフにした作品。ストーリーが伝わりやすい作品と場所で、かつ展示解説も詳しい。作品の周りの花壇は地域住民の協力で美しく整備管理され、SNSで発信もされていて、作品とその空間の魅力発信にもつながっている。

出典：福岡市パブリックアートガイド・三彩をもとに筆者作成 写真：筆者撮影

(3) 福岡市へのインタビュー調査(質問書への回答)

現状調査後に2022年10月から11月にかけて福岡市住宅都市局地域まちづくり推進部都市景観室にインタビューを行った。「公共の福祉、地域共同体の活性化、文化的価値の付与に目的をもつもの」という目的を果たすパブリックアートを目指すにあたり、【作品の選定方法】【作品の設置場所の決定方法】【作品の管理・整備担当とその方法】【まちづくりとの融合】は重要なため、インタビュー内容はそれを中心としている。

また新型コロナウイルス対策のため、直接の接触を避け提示した質問書への回答書をいただく形式をとっている。なお回答書だけでなく、作品の設置経緯の詳細が分かる資料もいただくことができたため上記の現状調査に追記している。

【作品の選定方法】

昭和57年度から始めた「彫刻のあるまちづくり事業」は、17年間で23基の屋外彫刻を設置し、都市景観や文化の向上に一定の効果をあげてきた。しかし事業開始から17年が経過し、先導的役割の達成、市民ニーズの変化、公共事業のあり方の変化によって、事業の見直しが行われるに至ったため、平成10年に「彫刻のあるまちづくりに関する市民意識調査」と「有識者による意見交換会」を実施した。調査では、屋外彫刻に関心を持つ市民が7割に達しており、「感じの良い街並みづくり」や「芸術を身近に感じる」などの効果が評価されたが、一方で、作品の設置効果やまちづくりの中での彫刻の役割、市民との関わり方などについての問題も指摘され、単なる彫刻設置ではなく、芸術を総合的に捉えたまちづくりへの方向転換の必要性が言われた。

この結果をもとに、人々が心豊かになる「場づくり」、地域への愛着やコミュニティ意識を育む「人づくり」、創造的な行動や活動を生み出す「まちの活力づくり」を3本柱として、アートを媒介に市民主体のまちづくりを目指すべきとした。市民による主体的なまちづくり活動を促進し、まちの活力を高める事業へと方向転換を図り、単に屋外に彫刻を設置するのではなく周辺の都市空間全体の魅力を高め、市民の参加を積極的に取り入れながら事業を展開していくことになった。

(注)アートとは芸術の一分野で、美術館などの閉じられた空間で一部の愛好家によって楽しめるものではなく、まちなかで展開され公衆を対象として行われる表現活動(都市空間への彫刻設置、公共空間で行われる美術展、街頭パフォーマンスなど)を指す。

【作品の設置場所の決定方法】

- 市彫刻のあるまちづくり懇談会(「風のプリズム」1基) ※選定経緯の記載なし
- 市彫刻選考委員会において、市が提案する候補地に相応しいイメージと作者を選定し設置(「空の門」から「ミラーニジンスキー」までの17基)
- 市彫刻のあるまちづくり委員会において、作品、作家の選考をはじめ、設置場所、周辺整

備などの検討を行い設置（「大きな愛の鳥」から「平和の門ほか」までの5基）
○プロポーザルにて制作者選定（「長浜4899」から「Dragon King Rabbits」までの2基）

【現在目指している「アートを媒介した市民主体のまちづくり」とは（「彫刻のあるまちづくり」との違い）】

- （1）たんに彫刻作品を設置するだけでなく、作品周辺も含めたアート空間を整備する。
- （2）作品設置場所の歴史的・文化的背景等を考慮したテーマを設定し、場所との関連が深い作品設置や空間整備を行う。
- （3）作品のコンセプトづくりや作家・作品の選考を地域住民や作品設置場所にかかわる人々の参加によって行う。
- （4）広くまちづくりのなかでアートが活用されるよう、アーティスト等の情報を集積し市民等に公開する「作家・作品の登録制度」を実施する。
- （5）市内組織のネットワーク化のほか、市民、企業、NPO等と行政との役割分担をふまえた推進体制を確立する。

【作品の管理や整備担当とその方法】

道路上の彫刻につきましては、住宅都市局運営課緑地・街路樹係が担当し、公園内の彫刻につきましては、各区役所公園係が担当し維持管理等を行っている。

○道路上の彫刻

- ・ 日常管理は、住宅都市局運営課（公益財団法人 緑のまちづくり協会より清掃業者に委託）で定期的な清掃や安全点検等を行っている
- ・ いたずら等あった場合は、必要に応じ応急処置等を行っている
- ・ 整備等の計画は、現在はない

○公園内の彫刻

- ・ 日常管理は、各区役所公園係で安全点検、必要に応じ清掃を行っている
- ・ いたずら等があった場合は、必要に応じ応急処置等を行っている
- ・ 整備等の計画は、現在はない

【パブリックアートを利用した福岡市のアートあふれるまちづくりの取り組み】

令和5年度には、「福岡市都市景観賞」が第30回という記念すべき節目の年を迎えるので、記念事業を実施することとしている。その記念事業の中で「都市景観賞の受賞作品」や「彫刻のあるまちづくり事業で設置した彫刻」等を巡る景観ガイドツアー等を実施できればと考えている。

(4) 福岡市のパブリックアートの課題

①作品の存在・ストーリーが伝えられているか

パブリックアート作品の中には、景観に埋もれ存在感が消えてしまっている作品が見受けられた。展示解説も特になくもないものもある。作品が分かるような目印や工夫が必要である。

また現存のパブリックアートガイドも資料が不揃いのため、調べればわかる距離感にそのストーリーが分かる資料も全て必須であると考えられる。作品の詳細な設置経緯も、できる限り市民にも共有することで、その存在をより身近に自分たちのものとするきっかけになるのではないだろうか。

②地域活動・コミュニティとの連携

今回の調査の中で、福岡市の「一人一花運動」の応援の元に美しい花に囲まれている作品が多いことが分かった。設置された場所や景観は変えられなくても地域活動やコミュニティとの連携で、間接的だが地域共同体を活性化させていくことは可能である。また中央区役所前の「博多やまかき小僧」や高宮駅前広場の「ソフィー」等四季折々で山笠仕様や寒さ対策のマフラーが着用される演出は、他の作品にも応用できる。

③文化的な価値を生み出すための機会の創出

インタビュー調査にて福岡市の今までの取り組みだけでなく、今後の取り組みも知ることができた。「福岡市都市景観賞」が第30回という記念すべき節目の年に、SNSを使った「都市景観賞の受賞作品」の発表や、2月に行われる「彫刻のあるまちづくり事業で設置した彫刻」等を巡る景観ガイドツアー、最近では「まちなみ写真コンテスト展覧会」が行われている。パブリックアートも含めた文化的な取り組みを行いその価値を届けていくことで、結果的にアートを中心とした人のにぎわいの創出に繋がっていくことを期待したい。

(5) 他地域のパブリックアートへの取組み(瀬戸内国際芸術祭)

福岡市のパブリックアートをさらに「公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値の付与に目的をもつもの」とするため、参考として他地域のパブリックアート調査も行った。瀬戸内国際芸術祭は「美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の「希望の海」となること」を目指して2010年から開催されている。2019年に開催された際には117万人の来場があり、制作されたパブリックアートは、その後も展示され続けているものが多い。島の発展に貢献している瀬戸内国際芸術祭の作品を調査しインタビューを行い、その取り組みを1つの参考として、福岡市のパブリックアートへの提案としたい

①2 基の現状調査

現状調査は、瀬戸内国際芸術祭実行員に事前にインタビューを行い推薦していただいた作品の中の2基を対象に行った。

表2 瀬戸内国際芸術祭作品2基

⑦海を夢見る人々の場所	作者：ヘザー・B・スワン+ノンダ・カサリディス
設置：2022年	場所：豊島・甲生
	オーストラリアを代表する現代美術家と建築家によるユニット作品。漁網のような流のような質感が鉄鑄造で表現されている。触れることができ交流もできる作品であり、かつ海、空、そこを利用する人々、行き交う人々によって作品の全体の印象も変わるであろうユニークな作品。海をゆっくり眺められるゆとりある空間で、周りの流木も椅子にされるなどの工夫もされている。
⑧島キッチン	作者：安部良
設置：2010年	場所：豊島・唐櫃
	「食とアート」をテーマに、人々を繋ぐ出会いの場として集落の空き家をレストランとして設計・再生されている。豊島の人たちとの交流、豊島の食材を使った料理、豊島の植物、果樹の成長も楽しむことができる空間を提供している。

出典：瀬戸内国際芸術祭ホームページをもとに筆者作成 写真：筆者撮影

おすすめ作品(特別開館でなくても鑑賞できる屋外作品が中心)

- ・小豆島「空の玉／寒霞溪」「はじまりの刻」「ダイダラウルトラボウ」
- ・豊島「海を夢見る人々の場所」「島キッチン」
- ・高松港「屋島山上交流拠点施設」「やしまーる」
- ・男木島「男木島の魂」「歩く方舟」

②瀬戸内国際芸術祭へのインタビュー調査(質問書への回答)

2022年10月から11月にかけてに瀬戸内国際芸術祭実行委員広報の方にインタビューを行った。インタビュー内容は、福岡市住宅都市局地域まちづくり推進部都市景観室へのインタビューの際と大きく相違ないものとしている。新型コロナウイルス対策のため、直接の接触を避け提示した質問書への回答書をいただく形式をとっている。

【作品の選定方法】

昭和57年度から始めた「彫刻のあるまちづくり事業」は、17年間で23基の屋外彫刻を設置し、都市景観や文化の向上に一定の効果をあげてきた。しかし事業開始から開催年の2年前に公募(参考：<https://setouchi-artfest.jp/news/new/detail212.html>)により選定をしている。アーティストから提出されたプランに基き、総合ディレクターである北川フラム氏らが決定している。1回目から選定基準に大きな変化はないが、本年については新型コロナウイルス感染症の影響があったので、海外アーティスト等については、来日状況やリモートでの制作可否を考慮して選定された。

【作品の設置場所の決定方法】

地元の市町の提案やアーティストや作品制作会社が見つけた、実行委員会が地権者と賃借

交渉して決まる。最終的には、アーティストや作品制作会社が決めている。

【作品の整備や管理担当について】

管理については、各作品の所有者が行っている。直島の美術館などの施設については、福武財団やベネッセホールディングスが管理・整備をしている。各市町が所有しているものは各市町が行っている。また、瀬戸内国際芸術祭実行委員会が管理・整備（修繕については制作会社に委託）しているものもある。

【経年劣化した作品への取り組みについて】

毎回 200 作品程度の作品が展示されるが、およそ半数が継続作品で半数が新規作品となっている。本年展示した作品も地元の要望やアーティストの意向、メンテナンスの手間や費用、総合ディレクターの意見を総合的に考慮して、継続展示するのか撤去するのか、閉幕後に決められている。継続展示しているものも劣化等しているものは撤去する場合もある。逆に経年変化が楽しめる作品もある。

【瀬戸内国際芸術祭と作品について】

瀬戸内国際芸術祭は 2010 年に始まり、12 年経ったが、最初は現代アートが何なのか、島民や地元では理解されなかった。12 年経った今、多くの島民に受け入れられているのは、アーティストが地域に入り込み、地元の方や国内外のボランティアと交流しながら一緒に作品を制作したことが大きな要素であったと感じている。ただ、別の場所で制作したアートを持ってきただけだと、アートを自分事のように感じないため、ただのオブジェとなってしまう。如何にアートを地元の方々自身の“もの”として考えてもらえることができるかが大切である。

③調査から分かる工夫と福岡市パブリックアートへの提案

(ア) 作品に関する情報提供

島にある全てのアート作品にはコードが打たれ、分かりやすい共通した案内表示があり、芸術祭だけでなく島のホームページや MAP 等に解説案内が加えられていた。島を歩いているだけでミュージアムにいるようであり、逆にこれほど徹底している地域はなかなかないかもしれない。福岡のパブリックアート作品展示にも活かせるのではないだろうか。公共の福祉までは遠いが、まずは間接的にでも作品の存在に気づいてもらえる工夫から始めたい。

(イ) アート作品を中心とした交流空間の創造

調査した 2 基に共通するのは人々の交流空間を創造できる作品であることだ。作品そのものの大きさや魅力でもあるが、地域住民が日頃から集える空間になるような働きかけにより、結果的に作品やその空間をさらに「公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値



写真1 作品看板
筆者撮影

の付与に目的をもつもの」にできている。瀬戸内国際芸術祭実行委員広報の方のインタビューにある「如何にアートを地元の方々自身の“もの”として考えてもらえることができるか」が徹底されている。

福岡のパブリックアート作品ではこのような機能をもつ作品は少ないかもしれないが、福岡市住宅都市局地域まちづくり推進部都市景観室へのインタビューで伺った「アートを媒介とした市民主体のまちづくり」を行っていくことが、パブリックアートをその要素(公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値の付与に目的をもつもの)に近づけていくと考える。(4)の③で提示した「パブリックアートも含めた文化的な取り組みを行いその価値を届けていくこと」を継続的に行っていくことが最も重要である。

(ウ) 周囲の空間との一体的なデザインの必要性

SNS を利用したシェア文化が日本に定着してずいぶん経つが、「フォトスポット」を設置して作品だけでなくその空間の魅力を共有する手法を用いている所はいくつか存在する(例：武雄図書館等)。



写真2 豊島美術館カフェ
筆者撮影

最高の場所で、作品だけでなくそこに空や海、その時の天気や気候によっても変化する、作品のある魅力的な空間の共有文化がここには存在していた。写真2は豊島美術館カフェだが、豊島美術館内で作品の写真撮影はできないが、同様の形をしたカフェでは撮影可能でありフォトスポットのような役割を果たしていた。パブリックアートを撮れるフォトスポットに長蛇の列ができていた光景をいくつか目にした。福岡でもできるのではないだろうか。

3. アプリの活用の提案

パブリックアートの要素(公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的価値の付与に目的をもつもの)をハード的な予算を気にすることなく補完する方法としてアプリがある。パブリックアートだけでなく、街中にあるアートをもっと身近に感じ日頃から楽しんでもらう機会をつくるために、そのきっかけづくりとしてのアプリの活用を提案したい。新規でアプリを作成しなくても、現在存在するアプリに導入できそうな活用例を挙げる。

(1) 「LINE」アプリの活用

福岡市は、生活情報や防災情報等を「LINE」アプリを使い発信している。この中に「アート」区分を作成できないだろうか。もし「アート」区分が作成できたら、アートに特化した情報、すなわちミュージアム展示情報やアートイベント情報の発信が可能となる。すでに「生活情報」の中の「イベント・おでかけ」の中でこういった情報に辿り着くことはできるが、エンターテインメント情報と混在されていて見つけづらい。「アート」区分があればアートのほしい情報が見つけやすくなるだろう。

またイベント最終日近くなると届く「忘れてないですか?機能」が追加できれば、見逃しがちなアートイベントも減り、更に足を運ぶ人も増えるかもしれない。

(2) 「SARF」アプリの活用

福岡で使われているまち歩きアプリとして、エイベックス・エンターテイメント株式会社が作成した「SARF」アプリがある。スマートフォンの位置情報と音声コンテンツを組み合わせたARアプリで、美術館にある音声ガイドのようなシステムを、スマートフォンを使って、街中で誰もが利用することができ、現在は観光ガイドとして、博多旧市街地を中心に「博多伝統文化めぐり」「博多寺社めぐり」というコンテンツがある。

パブリックアートもこの中に導入できないだろうか。瀬戸内国際芸術祭での現地調査では作品の目印となる看板が非常に有効的だったが、看板でなくても位置情報でその作品の存在を伝えてくれる機能があると非常に便利だ。そのストーリーを音声と文字の両方で伝えてくれれば、障害がある方々にも役立つだろう。

また現地調査での気づきだが、海外からの観光客の方がパブリックアートと写真を撮っていたり、触れて楽しんでいる光景を目の当たりにした。触れて楽しめる作品は「触れられる」案内を入れてみると、違う形で作品を楽しむことができるかもしれない。

そして現在は福岡に関するところでは博多地区の近世までの歴史を知るコンテンツのみの提供となっているが、例えば百道の「アジア太平洋博覧会(よかトピア)」をきっかけに作成された建築やアート作品を巡り、福岡の現代史を知るコンテンツも作成できるはずである。

(3) 「ふくおか散歩」アプリの活用

福岡で使われているまち歩きアプリとして、もう一つ「ふくおか散歩」というアプリで、歩くことがそもそもの目的である健康チェックアプリがある。こちらは歩いてポイントを集めると、特典や抽選に参加できる権利が与えられたり、スタンプラリーもあるようだ。現在スタンプラリーは準備中になってるようだが、この中に例えば最寄り駅近くのパブリックアートを取り入れていただくこと等はできないだろうか。毎年開催される福岡ミュージアムウィークではスタンプラリーが行われ、それを楽しみにされている方もいることだろう。日頃から街中のアートやイベントでスタンプラリーが楽しめれば、足を運ぶ人も増えるのではないだろうか。ポイントが集められたり、特典がいただければ楽しみも増すに違いない。

(4) 新しいアプリの作成と活用

ここまで現在福岡で利用できるアプリを活用した提案をしてきたが、新しくアートに特化したアプリを作成する方法もある。第2章では「彫刻のあるまちづくり事業」で製作された25基をご紹介したが、福岡市内には実際に230基以上のパブリックアートが存在する。

それを利用して、例えば、それを「歴史」「現代アート」「インターナショナル」等の区分や、場所の「福岡銀行本店広場」「福岡市美術館」「博多リバレイン」、「動物」「食べ物」等に分け、アプリの中でスタンプラリーや、MAP を利用したウォークラリーが楽しめる仕組みを作成するのはどうだろうか。歩きながらアートを知り福岡を学ぶきっかけづくりになるかもしれない。



写真3 川上音二郎像
筆者撮影



写真4 柱は柱
筆者撮影



写真5 ウォーターゲート
筆者撮影

おわりに

筆者が福岡市内に在住している16年の間に、そのまちなみは随分と変わった。変わりゆくまちの中で変わらないパブリックアートの存在は、時に目立つ存在となることもあれば、新しい建築や通りの陰に入ることもあり、残念ながら撤去されることもある。

以前出張で神戸市内を訪れた際、初めて訪れるまちの中で見たことのあるアート作品を多く目にした。第2章の⑩でご紹介した黒川晃彦氏の作品だったのだが、まち並みや背景、管理が福岡のそれと比べると違い、美しく、福岡に戻り改めて作品を見た際に残念ながら不憫に感じてしまったのである。「歩きたくなる福岡のまちづくり～居心地よく、アートあふれる空間」というテーマで私がパブリックアートに注目したのは、華やかなまちの中にひっそりと存在するそういったアートに少し光を当てられないかという思いからだ。

パブリックアートの本来の要素である「公共の福祉や地域共同体の活性化、文化的な価値の付与に目的をもつもの」を常時全て備えていくのが困難であるのは今回の調査結果を通して分かったが、単なるオブジェにせず「自分たち自身のもの」と捉えてもらうためにできる工夫として、作品を中心にした人の交流空間を作ることが重要であると筆者は考えている。そして、福岡市が「彫刻のあるまちづくり」から今目指している「アートを媒介した市民主体のまちづくり」は、根本的に私が重要とするところと大差がない。このような動きが、最終的にはそのまちに生きる人々の Well-being に繋がるのではないだろうかと考えている。

誠に勝手ながら沢山の提案を論文の後半に挙げたが、少しでも活用していただけると幸いです。

参考文献

- ・松尾豊：『パブリックアートの展開と到達点 アートの公共性・地域文化の再生・芸術文化の未来』
水曜社 2015年3月
- ・林容子：『進化するアートマネジメント』 レイライン 2004年5月
- ・竹田直樹：『日本の彫刻設置事業 モニュメントとパブリックアート』 公人の友社 1997年7月
- ・柳生不二雄：「市と民間企業による彫刻設置推進—さまざまなプランから—」『三彩』 三彩社 1993年
2月
- ・福岡市ホームページ <https://www.city.fukuoka.lg.jp/>
- ・福岡市パブリックアートガイド
https://www.city.fukuoka.lg.jp/jutaku-toshi/toshikeikan/create_keikan/sculpture.html
- ・瀬戸内国際芸術祭ホームページ <https://setouchi-artfest.jp/>